

血液型分布に見る日本古代史

SRC News No64迄、3回に分け、世界各地の血液型特性（A,B型比率とO型比率の比[A/O]、[B/O]）を紹介し、日本列島特性について考察しました。本稿では、日本列島の特性成立過程、日本古代史をたどってみます。

1. 日本列島特性の地理的分布

表-1に、都府県の血液型特性（以後、特性とする。）を示します。[B/O]が約0.7から0.8の狭い範囲に、[A/O]は0.9

から1.7と広く分布します。図-1に、[A/O]が、北の青森から南の鹿児島へ向けて増加し、南琉球の[A/O]は東北と同じで、北の九州へ向けて増加する様子を示します。これが、A型の東西勾配と呼ばれ、最終氷河期以降一万年に渉る拡散・交流により定着した基層（東日本・縄文型）特性と3千年前頃から一千年以上に渉る渡来（西日本・弥生型）特性の北上に伴う交流を通して成立した日本列島の独自の特性とされています。図-2

に、各都府県の[A/O]と地理的位置関係を示します。[A/O]と位置関係が連続的に対応して変化する範囲を黒く塗っていますが、青森から列島中央を南下して長野に至る範囲は明瞭な東西勾配（+）ですが、長野以北の中央部を囲む様に、日本海側は北陸から上越へ、太平洋側は近畿南部から東海、関東南部を経て北部に延びる広い範囲や中国、四国から東九州にかけての範囲では、逆勾配（-）となり、近畿から中国と、九州北部から南と西に向けての地域では（+）勾配が見られます。次に、勾配逆転地域について考察します。

表-1 日本列島主要部血液型特性分布

A/O	B/O				ユーラシア大陸	記号
	0.60-0.65	0.68-0.76	0.78-0.84	0.92-1.05		
0.88-0.97	鹿島	甌島、青森	樺太アイヌ	北津軽	ロシアウズムルト	A
1.06	-	岩手	南琉球	-	ネパールグルカ	B
1.12-1.13	北琉球、対馬	-	秋田	朝鮮北部	-	C
1.16-1.19	胆振アイヌ	宮城、山形	石川	朝鮮中部	エストニア、ラトビア	D
1.22	-	福島	群馬/茨城長野	-	ウズベク、ネパール	E
1.27	-	奈良/島根	福井/和歌山/静岡/千葉	-	ウクライナ	F
1.30-1.32	沖縄本島	三重	東京/埼玉/山梨、栃木	-	モルダビア	G
1.35	-	大阪/愛知/神奈川	-	-	-	H
1.38-1.39	-	京都/兵庫/大分	-	-	-	I
-	-	富山	福岡、新潟	朝鮮南部	ロシアバシキル	J
1.41-1.43	-	熊本/鳥取	広島 滋賀	-	ハンガリー	K
1.46-1.48	-	山口/佐賀	-	岩崎	-	L
1.50-1.52	-	鹿児島	徳島/香川/高知	-	-	M
1.56-1.60	-	-	宮崎/岐阜/長崎	甌島	-	N
1.64-1.66	-	-	愛媛	岡山	-	O
1.78-1.82	岡山牛窓町	-	-	隠岐	-	P

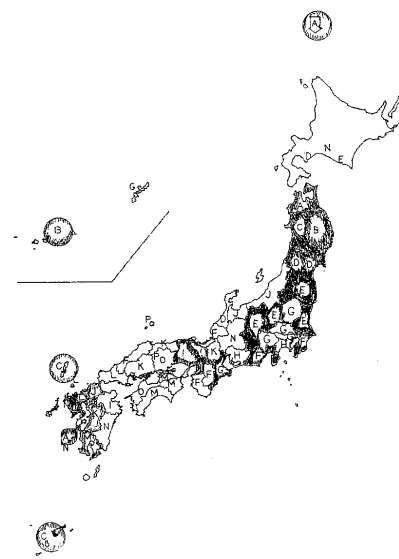


図-2 縄文人の南下

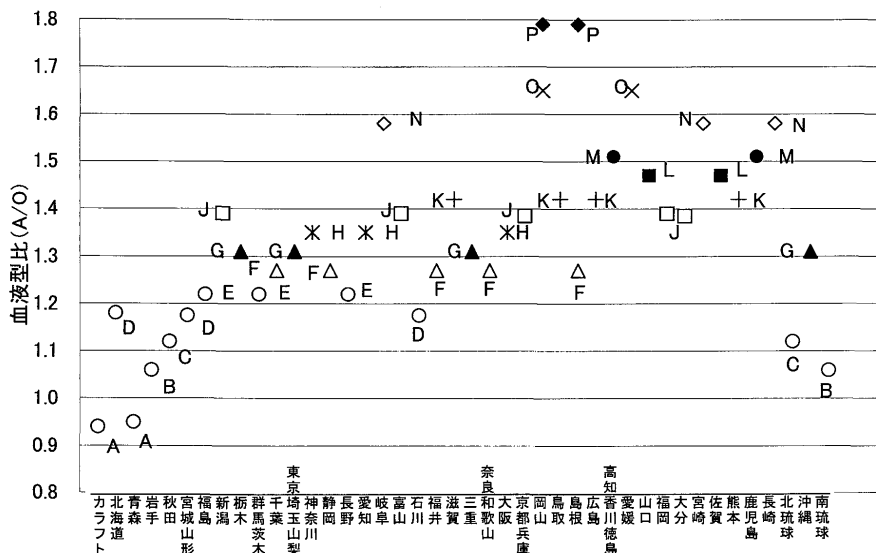


図-1 我国における血液A型の東西勾配

2. 西南九州、四国及び瀬戸内海地域

図-3に[A/O]が最も高い地域を黒く塗った地図を示します。九州西部から南部を回り、四国全土を覆い、中国の岡山と対して瀬戸内海を扼し、飛び地の様に岐阜に延びています。なお、東西日本の植生や文化基層を分けるブレキシトン線が岐阜を横切っており、西九州を起点とする弥生勢力が南九州を経由して四国に渡り、瀬戸内海沿いに北上して縄文の南境に達した道筋の様に見えます。古事記

の神武天皇東遷に記された日向を出て、豊予水道を北上し、筑紫、阿岐、吉備の滞在16年に及び瀬戸内海彷徨との対応や記述に窺える南方の習俗は弥生勢力のルーツと列島拡大の経緯を一人の英雄の物語に凝縮したものと思えます。

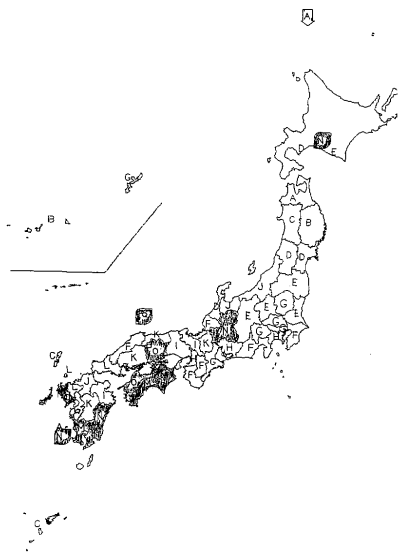


図-3 弥生人の北上

3. 北九州、中国、近畿、北陸地域

[A/O]が、西南九州より若干低い地域を黒く塗って、図-4に示します。九州は北から中部へ、中国地方は岡山を除く全域から近畿北部を経て、日本海沿いに北陸・上越に共通の特性が伸びています。

弥生勢力が西日本を席捲し、縄文勢力の強い列島中央部を避けて北上して行った経路を見るようです。環濠集落跡、戦死者の遺体、銅剣や銅鐸等に代表され、魏志倭人伝の倭国騒乱時代に対応するのかもしれませんが、縄文地域の裏側の北陸への進出等、政治権力の意志も窺えるように思えます。古事記に見る神武以降崇神天皇までの大和周辺から近畿北部を固め、中国、北陸方面への勢力拡大に対応し、歴代后妃が服属勢力出身であるこ

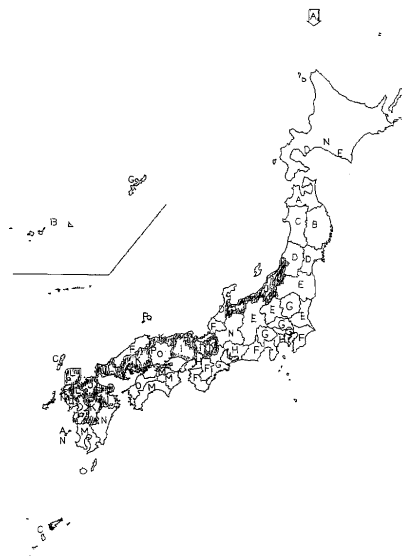


図-4 縄文人と弥生人の西日本、北陸への拡散

とから、弥生と縄文両勢力の交流が進み、後者による吸収が[A/O]の低下に現れていると考えられます。

4. 出雲、近畿、東海、関東地域

[A/O]が、3. の地域より低く、長野より若干高い地域を黒く塗って図-5に示します。近畿南部から東海地域、関東

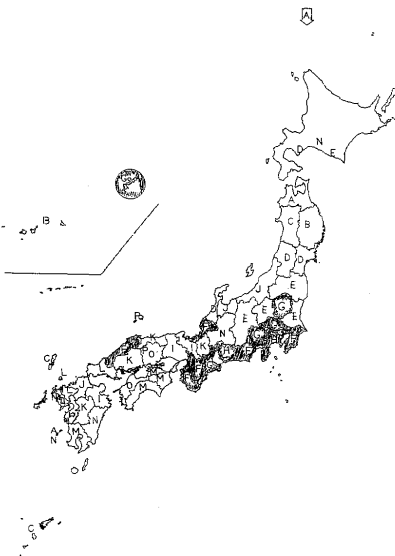


図-5 大和と出雲の結びつきと関東への進出

南部から北部にかけてと、飛地の様に山陰の出雲地方に共通の特性が広がっています。大和、出雲両勢力連合が西日本を抑え、東海道沿いに関東南部から北部を制して、東北南部へと列島統一の意志が読取れる様です。前方後円墳、埴輪、鉄剣の銘文に見る大和勢力との関係など時代は古墳時代に進みました。古事記に見る崇神天皇の尾張以東12道の制覇、越からの東北南部侵攻、関東の天皇家出自有力氏族出現や渡来勢力入植等の記述は特性分布と良く対応します。一方、出雲は先行する神話時代からの大和に次ぐ有力勢力とされており、山陰という飛地にも拘らず特性を共有する程の濃密な関係にあったと考えられます。これら地域が縄文型に近い理由に、本来の縄文勢力圏への進出と交流は弥生勢力の縄文勢力への吸収を一層推し進めたと思いますが、出土品等に見る騎馬文化は縄文型と共通な特性を持つ勢力渡来の可能性も否定できません。

朝鮮南部との騎馬文化の共有、古代中国周辺の西方系騎馬民族の活動、西方系遺伝特性を持つ古代中国人の存在、高句麗広開土王碑や記紀に見る朝鮮半島進出は権力中枢への西方系勢力の影響を伺わせませす。しかしながら、日本列島の稲作文化継続の事実は、弥生型の縄文型への吸収が権力中枢の変質を齎した主要な背景と思われる。バイキング出自のロシア・キエフ王朝の急速なロシア化、フランス出自のノルマン系イングランド王朝のフランスへの執着は、千年前に日本列島に起ったことと同じように思えます。

おわりに

血液型特性勾配の反転する地域に着目し、特性分布と古事記の記述の対応から古代日本の成立をたどってみました。統計的数値から個々の事件を追うことはできませんが歴史の動きを俯瞰し、理解するには役立ちそうです。